

さざなみ

国語教室

さざなみ国語教室
 第473号 2021年8月25日
 発行者代表 吉永幸司
 連絡先 大津市柳川2-11-5
 TEL 077-522-1008
 発行所 滋賀児童文化協会
 NPO 現代の教育問題研究所

「思考力・判断力・
表現力」を育む工夫を
堀江祐爾

三木恵子先生（元兵庫県たつの市小学校教諭）の二年生学級での「授業びらき」の際に展開された「思考力・判断力・表現力」を育む工夫について紹介したい。

■四月七日（始業日）の板書には「手ごみをよんで／うごきましよう。」と書いてあり、次のような手紙が貼られてあった。

二年生 進級おめでとうござい
ます。／今日から、おにいさん、
おねえさんです。／／じぶんとい
いこと・わるいことをはんだんし
て／／こうどうにうつせる二年生に
なってほしいとおもっています。
／／つくえの上のかくにんをしま
しょう。／／※たくさん、お手がみ
があります。／／※ノートが五さつ
あります。／／たいせつなもので
す。どうしたらいいですか？／／か
んがえて／／こうどうしましょう。

多くの教師は始業式から戻った後、「お手紙を連絡袋に入れましよう。」「ノートに名前を書きましよう」と指示するであろう。そうした指示が、実は子どもたちの「思考力・判断力・表現力」を奪うものであることに気づかず。三木先生は、「どう考えて、どうしましたか？」と子どもたちに問いかける。何人かの子どもが、自分で考え、決めて、行動（表現）したことを確認。できなかった子どもは仲間の行動から「なるほどそういうふうな考え、決めて、行動すればよいのか」ということを学んでいく。

■四月八日（二日目）の板書。

お早うございます。／今日はたくさん出するプリントがありますよ。／自分ではんだんしてうごいてみましょう。

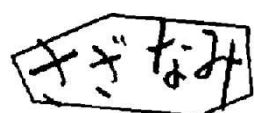
黒板の前にはプリントを入れる箱が並んでいる。ただし、何を入れるかを示すラベルなどは貼られていない。教室に入ってきた子どもがあれこれ考え、相談して、プリントを入れていく。朝の会の際に、三木先生はプリントが分類されて出されていることを確認。そして、一番最初にプリントを入れて子どもたちに手を挙げさせ、「この人たちに大きな拍手を！」とほめる。もちろん、プリントを出せなかった子どもたちが追加提出する時間も設定。ここからも子どもたちは、「そういうふうな考え、決めて、行動すればよいのか」ということを学んでいく。

■四月九日（三日目）の板書。

お早うございます。／あさのかけ足に行く時に／くつばこにばんごうシールを／はっておいてね。

普通なら教師が靴箱に番号シールをきれいに貼ることであろう。三木先生は子どもたちに貼らせました。子どもたちが貼るとシールの位置がバラバラになってしまふ。実はそこに価値がある。子どもたちは、どこに貼れば分かりやすいかを「考え、決めて、貼る（表現）」ことをおこなった。

このように「授業びらき」の時から「思考力・判断力・表現力」を育む機会を何度も与えられた子どもたちは、「自分で考え、決めて、行動する」ことができるようになっていく。こうした工夫ができる教師になりたいものである。（神戸女子大学教授・兵庫教育大学名誉教授）



▼令和2年3月、新型コロナウイルスの感染拡大防止策として政府が要請した小中高校などの臨時休業から約1年と4月が過ぎた（令和3年7月現在）。このころで気になってくるのが、現在小学校2年生の子どもの達である。▼入学した子ども達の間として学習の仕方、学校における暮らし方、友だちとの関わり方を学ぶ時期である。それは、集団生活における生活の仕方や約束を覚える時期である。国語科で言えば、平仮名を正しく覚えることを初め、基礎となる内容を正しく学習する指導を受けながら「学ぶ」とを少しずつ蓄える時である。教師にとっても一人一人の子どもに寄り添い、不安な心を共有し、子ども達の理解をしながら、信頼関係の初めの一歩である。教育には、時間をかけて身につけることと、その時、その時代で育てておくべきことがある。▼学校が始まって、全校で学ぶ機会が少なく、学校生活の全体が理解できないまま2年生に進級した子どもに、2年生の先生は、1年で学ぶべき学習内容は、習得しているであろうという前提で授業や日々の指導が行われている▼気を付けて2年生の子を観ると、今までと違うと感じることがある。1年生の最初の学習や暮らしの指導ができていなかったというところを理解してほしい。「今までと違う」を大事にして、応援してやってほしいと思うこの頃である。（吉永幸司）

**国語科における
一人一台端末活用
谷口映介**

一人一台端末の導入が進んでいる。本校国語科では、ノートや教科書、鉛筆と同じように、一つの道具（ツール）として捉え、教科内での主な活用方法として、次の五つの視点での活用を模索している。

- A 「発表ツール」：プレゼンテーションの作成・発表
 - B 「記録ツール」：静止画や動画、メモを記録・保存
 - C 「提示ツール」：静止画や動画など多様な情報の提示
 - D 「共有ツール」：複数の資料を共有して交流・思考
 - E 「検索ツール」：必要な情報を得るために検索
- （出典：「日本教育新聞」二〇二一年四月十九日付）

以下、実践の中で具体的な活用方法をいくつか紹介したい。
三年「こまを楽しむ」（光村図書）
【C 「提示ツール」】
「Air Drop」機能で、本文の「初め」の段落を送り、二つの「問い」を赤青の二色で色分けをした。この際、「マークアップ」機能を用いると、間違いを気にすることなく何度も試行錯誤をしながら線を引くことができた。そして、「中」を読む前に六つのこまの写真のみをタブレット上で共有し、

①どんな工夫があるか、②どんな楽しみ方ができるかの「問い」に沿った観点で「答え」を予想した。子ども達は、写真に書き込みながら、「きつ」と、こう回すのだ。「ここに穴が開いているから、音が鳴るに違いない。」等、タブレットの書き込みを見せながら交流していた。その上で本文を読むことで、説明の仕方や事例の順序に着目することができた。

【D 共有ツール】
事例の順序について考えるために、六つのこまを「回る様子を楽しむこま」と「回し方を楽ししむこま」に分類する際に活用した。使用したのは「ロイロノート」である。付箋機能を使えば先に共有した六つのこまの分類作業が画面上で容易にできる。また、全員の分類結果を写真の一覧として提示・共有することも可能である。分類する活動の際には、文章に何度も立ち返りながら、こまを仲間分けする姿が見られた。同じ分類や異なる分類をした学習者同士で考えを交流していくことで、文章表現や「終わり」と「中」の段落のつながりを捉えることにつながった。

タブレット端末の活用において重要なのは、あくまで国語科において身に付けさせたい資質・能力の育成を支援する一つの手段として活用であり、使用そのものを目的化しないことである。学習者自身が主体的に選択・活用できるように実践を重ねていきたい。（滋賀大学教育学部附属小学校）

**「主体的・
対話的な学びを育む」
三上 昌男**

新聞記事を読み比べ、書き手の意図を考える五年生の学習。
新聞を定期購読されている家庭が減少する中で、児童が新聞を読むことに興味関心を持つことが、主体的な学びを育むために必要である。

授業改善の視点として、次のようなことを大事にしたい。
■今までに新聞記事を読んだ経験や新聞づくりに取り組んだ学習、書き手の意図や表現の工夫について学んだ説明文の学習を想起できるようにする。

■教室や図書館で実際に新聞を手に取り、様々な新聞記事を読むことができる学習環境を整備する。
■児童が興味を持った新聞記事のデータを整理し、気に入った新聞記事を紹介したり、互いに読んで意見や感想を交流したりできるようにする。

新聞記事は事実を中心に書かれており、結論を見出しで先に示し、リードから本文へと次第に詳しく記述していくという構成になっている。内容を的確に捉え、文章を関連付けて読みながら書き手の意図を推論する力を養うのに適した学習素材である。

また、同じ出来事を取り上げた二つの新聞記事を読み比べることにより、共通点と相違点をはつきり捉えることができ、効果的に書き手の意図を読み取ることができ

本単元五時間目の授業を参観した学級では、担任の先生が四つの新聞記事を準備されていた。児童は、自分が最も興味を持った記事の一つを選び、「新聞記者になったつもりで、見出しを作る」学習に取り組んでいた。四つの新聞記事は、どれも児童にとって理解しやすく、興味を引く内容であり、児童は、手引き書「見出し名人への道」に示された見出し作りのコツに留意しながら、意欲的に取り組んでいた。

同じ記事を選んだグループで、見出しを交流することになった。授業者は、「この記事は、〇〇を伝えたいから、△△という見出しを付けた」という話型を示して交流を促された。本時は、児童が友だちとの交流を生かし、個々に自分の見出しを練り上げる学びを指して展開されていた。

授業後の研究会では、「書くこと」を生かし、主体的・対話的な学びを育む指導の在り方を協議された。

対話的な学びを育むためには、「考えの根拠や理由を引き出す質問」を大事にしたい。見出しのものとなる具体的な文や言葉、写真との関係について、個々の考えを引き出す質問ができる児童同士の関係を築きたい。根拠や理由をはっきりさせることは、筋道立てて考え、自分の考えに自信を持つことにつながる。このような指導により、見出し作りを通して書き手の意図を考える学習を深めることができる。

（滋賀県総合教育センター）

**事実にもとづいて
書かれた本を読もう
本を読んで感想を持ち、
紹介しよう**
蜂屋 正雄

「ランドセルは海を越えて(光村図書・四年)」では、ノンフィクションの本を読み、紹介するという学習を行った。

校内研究では「考えることを楽しむ子ども」の姿を目指している。国語科の学習では、文章を読んで感想や思いを持ち、話し合う中で作品への理解を深めていきたい。しかし、「自分の思い・感想」を持ってない(書けない)児童がいる。初発の感想や学習後の感想を書く学習を重ねてきたが、苦手な子ども「答え探し」をしていることに気づいた。自分がどう感じたか、どう思ったかに「正しい答え」はない。本単元では読書につなげる学習でもあり、どのような感想を持っててもいいという立ち位置から、誰もが感想を持てるようにすることを目標に学習を進めた。

まず、本文で気になったところはどこなのかが目で見てわかるように、線を引きながら読むことにした。

次に、線を引いたところを元はどうしてそこに線を引いたのかを書く。という順番に自分の思いを文にさせようと試みた。

まずは、線を引けるように「三色ボールペン」で読む日本語(斉藤孝著)を参考に、文章を読むときに三色に色分けをして線を

引く読み方に取り組んだ。大切なことばを青線、一番大切なことばを赤線、個人的に面白いと思ったところに緑の線を引きながら文を読む。

児童は、線を引き、また、友だちが引いた線を見ながら、青線や赤線は似ているところが多いことを確かめるとともに、赤線でも人によって違うこと、また、面白いと感じるところはそれぞれであることを知った。ここでは、教科書をタブレットで写真に撮り、全員の線の色がそれぞれであること、少し似ているところもあることが視覚的にも確認することができた。

線を元に感想を書く

「正解」を答えようとする児童は、正解は必要ないことを実感するとともに、自分と同じところに線を引いている友だちの感想を参考に書くこともできた。

「アフガニスタンでは、子どもも大切な働き手、学校に行けるかは家の事情で変わってくる。」に赤線を引いた児童は理由に、「家を代表して学びに行く、また、家で先生をしているのかな。そのためランドセルだと思ったから。」

と書くなど、書くことが苦手な児童も自分の引いた線を元に考えたことを書き、「ランドセルは海をこえて」の紹介文をまとめることができた。今後はそれぞれで読んだ本をビブリオパトルの形式で紹介してゆく予定である。正しい答えを求めて立ち止まるのではなく、まずは、自分の考えを書き残す学習を重ねていきたい。

(野洲市立北野小学校)

**夏休みと言葉
弓削 裕之**

五年生の娘がいる。夏休みの宿題で、同じ作家の二作品を読み比べるワークシートが出された。普段は宿題を見るのができていない父。悩んでいたのが、夏休みくらいは：と、少し助言することにしました。おすすめの作品や作家を紹介したが、乗り気でない反応。以前一緒に本屋に行った時に、珍しく「続きが読みたい」と言った本があったのを思い出した。大久保開さんの『ラストサバイバル』(集英社みらい文庫)という本だった。

「好き」は原動力だろうと思いついた。大久保さんの別の作品と一緒に探した。『絶滅世界』(同右)という作品が見つかったので、その二作品を比べることに決めた。

ワークシートの目的は、友だちに紹介すること。内容は、キャッチコピーと紹介文だ。キャッチコピーを考えるためには、両作品の共通点を見つけ、その作家の「らしさ」を見出す必要がある。表現はハードルが高いので、物語の筋からヒントをもらおうと思った。「どんな話だった?」と尋ねると、簡単なあらすじを話してくれた。あらすじを自分の言葉にすることで、共通点が見えたようだった。キーワードを書き出していろいろと組み合わせ、最終的に「家族を助けるために小学生ががんばる」というキャッチコピーとなった。興味を持ってくれる友だちが一人でもいてくれたら幸いだ。

キャッチコピーと言えば、家族で訪れた琵琶湖博物館では優れたキャッチコピーに出会えた。例えば、「ものがたりがねむるところ」。何の展示だろうと読み進めると、「琵琶湖のまわりには、古琵琶湖層群という地層がありま

す。」と書かれていた。そこで発見される化石などから昔の環境【ものがたり】がわかるのだという。次に、「長生きする湖」。一般的な湖は流れ込む土砂により数千年ほどでなくなるそう。琵琶湖はその何十倍もの時間埋まらないで生きている。それを【長生き】という言葉で表したのだ。【今の琵琶湖は その生い立ちの中でもっとも広い】というコピーも、知的好奇心をくすぐられる。実際、形だけでなく場所も移り変わっている琵琶湖の姿を見て、驚く我が子の様子が見られた。入念に練られた巧みな言葉の組み合わせが娘を立ち止まらせ、見事に学びへと誘ってくれた。ただ伝えるのと、言葉を選んで伝えるのでは大違いだ。「深い学び」の手がかりとして、二学期に活かしたい。

さて、もうすぐ五歳になる息子はというと、最近文字に興味を持ち始めたようだ。きつかけは、姉の家庭科の宿題。3分、5分、10分、15分に分けてゆで卵を作っていた。息子は、紙と鉛筆を握り締めて「どうかくの」と忙しい姉に尋ねていた。にこにこしながらこちらにやってきて「たまご、どれにしますか」と見せてくれた紙には、拙い字で「ちゅうもん」と書かれていた。

(京都女子大学附属小学校)

ICT活用の
スタート地点に立つて
岡嶋 大輔

全国的に学校のICT環境整備が進む中、本校においてもこの五月に各教室の高速無線LAN、一人一台のタブレット等々その環境が整った。ICTを授業の中でどのように使えばより効果的に学習が進むのか、その手探りもまだ始まったばかりである。

まずは、児童が各自でログインするところから。アルファベットやその小文字を習っていない低学年では、児童がキーボードでそれぞれに違うIDやパスワードを入力するために、担任の先生もひと工夫。パスワードを大文字に変えて書いた付箋を渡したり、早く入力できた子が近くの子に教えるようにしたりしながら、短時間で全員が始めのデスクトップ画面に到達できた。大人なら一瞬で済む作業でも、どの子も目を輝かせ喜びの声を上げた。タブレットを何度閉じては再度ログインする子どもも多い。未知に触れるわくわく感の上に、先生のさり気ない支援のもと、友だちと助け合いながら、困難に立ち向かって全員が目的に到達する、その喜びの声だと感じた。

告げて外で観察するよう指示した。タブレットで撮影した情報は後でじっくり見られるので、児童は、その情報以外に意識を向けて観察を始めた。葉っぱや花などの手触りを確かめたり、匂いを嗅いでみたり、草丈を測ったり、と様々な角度から観察をする児童の姿があった。

そして教室に戻り、タブレットの画像を操作しながら観察していた。葉や茎の表面、花の中を拡大する子、花の色の違いを比べる子など、様々な角度から観察し、部分にも着目して言葉に表す子がたくさんいた。スケッチについても、花の形を正確に捉えているもの、茎に生えている毛を細かく描いているもの、赤や赤紫などの色の違いをうまく表しているもの等、たくさんの方に気付きながら描いていることが分かる。静止画をスケッチすることで、より輪郭線やその色彩がはっきりと捉えられ、スケッチが苦手な子も鉛筆が進む。実物の観察と合わせて、静止画を操作しながらじっくり観察することの大きな効果が伺えた。

放課後、そうして完成した児童らの観察カードを一緒に見ながら、担任の先生がY児のことを話してくれた。Y児は普段、文を書く場面では全く何も書けず、先生が横に付いて対話しながらようやく書けるとのことである。そのY児が今回、一人で次のように書いていた。

(花) 5cm まるっぽい 色は色々
(花のあと) 5x4cm 長丸みどり
(つぼみ) 4cm 長丸 きみどり

なぞのみのしよたいは、たねぶくろだときぎましました。

Y児が一人でここまで書いたことはなかったそうで、スケッチも細かい部分まで描けていた。「なぞのみ」は、実物を観察したときに不思議に思い、教室に戻って観察し、友だちと話しているうちに「たねぶくろ」だと気付いたとのことだった。

この様子を聞いて、私は、虫眼鏡を持つだけで博士になりきっていろいろなものを覗いていた幼い日を思い出した。現在は、それを静止画にし、大きな画面で見、拡大したり並べたりして見ることができる。興味付けだけでなく、そういった機能をY児が活用できるようにした担任の先生の児童へのかわりがすばらしい。そして、そのことが友だちとのやりとりをも生み出し、Y児の学びにつながった。そのささやかに見える大きな成長を見逃さず、それを嬉しそうに語る先生がまた、素敵である。

ICT活用が叫ばれる今日、その活用ばかりに目を向けがちになるが、いつの時代も大切なのは、「意識的に」個々の子どもたちの学びにとってどうなのかと考えるながら授業づくりをすることである。子どもが対象と対話し、仲間と対話し、自己と対話するための方法が進化しただけで、その対話の質を見極め、子どもたちの流れを大切に授業づくりをしていく本質は変わってはいない。

(野洲市立北野小学校)

編集後記

▲七月例会
(第四七三回)
の提案は川端大
介さん(守山
市・立入が丘小)「一人一台端末
への抵抗をなくすICT導入実
践」。六月の五年の実践報告に続
いての二年生の実践報告。

ICT整備は様々なのが現在のICTの主体的・対話的で深い学びの現という目的に向けて、指導・学習活動として適切で有効に機能することが求められていると考え、「子供たちは機器を使い楽しんで活動した」と、そのことだけを目的にすることは流されないようにしたものだ。

子ども一人一人が学びをどのように広げたか、どのように深め合ったかと、実践を通じて具体的な学習場面での個別・協働の学びの実際を評価・検討して指導改善の積み上げを図ることが求められる。

▼実践報告では、二年生の年間の単元計画を持って一学期から実践を始めている。一学期は、新しい学習道具を使う場面での個々の子供の困り感に沿った指導と励ましに力点をおく。それを踏まえて二学期以降、物語の音読を録音・再生して、自分たちの音読を作っていくこと、30秒スピーチのモデルを視聴して、学習の見通しを持って取り組むこと等、学習活動の場面に取り入れていくという実践の姿勢に学びたい。
▼巻頭には堀江祐爾先生から貴重なご提案を頂きました。深謝
(森 邦博)